

# 実践報告 英語の授業での映画利用法（その4）

堀内 ちとせ

## 1 はじめに

英語が専門でなく、それほど得意でもない学生に対して、英語への感心を高め、少しでも学習意欲の向上を図るために、英語の授業の中で英語の映画を用いる。どのような使い方が良いのか、英語の映画の授業でのより良い使い方を、藤田保健衛生大学、衛生学部、衛生技術学科1年の120名（2000年度後期）を対象に検討する。

## 2 方法

- ①映画「ユー・ガット・メール」(日本語字幕付き)を5分程度の長さに区切り、22のパート(今回はその後半部分を使用)を作る。
- ②区切ったそれぞれのパートから、比較的短めで覚えておくと日常的に便利そうな表現(主に1文)を3つずつ選び出す。
- ③選び出した表現それぞれについて、きっかけになる直前の発話、その表現を構成している単語(特に聞き取ってほしい主なものを中心に)の最初のアルファベット、音声的補助記号等を与えたヒント・シート(資料1参照)を作る。

資料1<ヒント・シート例>

Scotch tape? (きっかけとなる直前の発話)

Wh ( ) is g \_\_\_\_\_ o \_\_\_\_\_ w \_\_\_\_\_ you? / N \_\_\_\_\_ ( ).

「●」: 音節(強勢の置かれる音節は「●」で表す)

( ) : 弱めに発音される子音

∪ : 音のつながり

↗ : イントネーション(上昇)

- ④聞き取らせる表現およびその表現に関連した他の表現、穴埋め問題、さらにその問題の解答を載せた音声的補助記号付き正解シート(資料2参照)を作る。

資料2<正解例>

● . ● . ● . ● . ● .  
Wha(t) is going on with you? / Nothin(g).

<他の表現の例>

● . ● . ● . ● .  
What's the matter with you?

● . ● . ● . ● .  
What's wron(g) with you?

<穴埋め問題および解答例>

“How's your aunt?”を聞かせた後にお兄さんお元気?

( ) ( ) ( ) ( ) ?  
(ここまでを提示して穴埋めをさせ答えを言わせた後、以下を提示する)

● . ● . ● . ● .  
How's your brother?

- ⑤日本語字幕入りで選び出した表現を7回ずつ録画したもの（聞き取り用）と、英語字幕入りでできるだけその表現のみを2回録画したもの（復習用）の2種類の編集ビデオ・テープを作る。復習用では、表現を流した後にその表現の英語字幕を出したまま5秒間固定し2秒間のポーズを設ける。

### 3 実践

- ①聞き取る表現の日本語提示：授業が始まる前に聞き取る予定の表現全ての日本語訳（できるだけ意識を避けたもの）を、あらかじめホワイト・ボードに書いておく。
- ②パートの視聴：チャイムが鳴り終わると同時に、ホワイト・ボードに書いてあるその日の表現に注意させながら、その日のパート（日本語字幕付き）を視聴させる。視聴中に表現の中で単語やフレーズなど何かメモできそうなら、メモをするように指示を出す。
- ③前回の表現の復習：その日のパートを見終わってから、前回の表現をそれぞれ英語字幕付きで2回（5秒間の固定後2秒間のポーズ×2）流す。
- ④聞き取る表現の予測：ホワイト・ボードに書かれているその日の表現の日本語訳をもとに、英語を推測させる。文にならない場合は、使われていると思われる単語だけでも推測させる。
- ⑤表現の聞き取り
- (1) ヒントなしで3回：聞き取る表現が出てきている状況、きっかけ、意味内容（分かりにくい場合は表現を直訳してやる）等を簡単に説明した後、ヒント・シートなしで3回映画音声聞かせる。その時、何か拾えた単語があればメモさせる。
- (2) ヒントありで3・4回：資料提示装置でヒント・シートを提示した後、さらに映画音声を3回聞かせる。ここで、学生を当てて答えが十分出ない場合は、日本人教員が少しゆっくり発音して聞かせる。
- ⑥解答確認：学生に答えを言わせた後、資料提示装置で聞き取らせた表現を提示しながら、その表現の日本語内容、どのような場合に使われる表現なのか等を言って聞かせる。その後、もう1回その表現の映画音声を聞かせる。最後に日本人教員の後について1・2回発音練習させる。
- ⑦他の表現の紹介あるいは穴埋め練習：聞き取った表現に関連した他の表現を1・2つ紹介（資料2参照）する。あるいは、関連した穴埋め問題をさせて答えを言わせた後、資料提示装置で正解を提示（資料2参照）する。その後、他の表現、あるいは穴埋め問題の正解を日本人教員の後について1・2回発音練習させる。

以上④～⑦までを3回（聞き取る表現の数）繰り返す。

### 4 今回の試みに対する反省（学生へのアンケートをもとに）

#### 4.1 パート視聴前の日本語訳提示について

今回も1人だけ「(字幕と違う日本語訳が出ると) 混乱する」とコメントしている学生が見られたが、今回は以前の86%、88%にも増して94%もの学生が「必要」と答えている。明らかに視聴前の日本語訳は「必要」と言って良いだろう。

<パート視聴前の日本語訳>

	(99年度)	(前回)	(今回)
必要	86%	88%	94%
不必要	4%	3%	2%
分からない	10%	9%	4%

4. 2 前回聞き取った表現のリポートについて

今回も前回の試みと同様、リポートは2回、同じように英字字幕を出したまま固定させてみた。ただし固定秒数を2秒から5秒に変え、さらに2秒間のポーズも入れた。また固定している間、表現の簡単な解説をも行ってみた。その結果、「必要」と答える学生の数が前回より10%も増加(67%→76%)した。英字字幕の固定秒数も前回の2秒と比べると約40%増(51%→89%)の学生が「ちょうど良い」と答えるに至った。固定秒数を5秒間にしたためか、英字字幕を「必要」とする学生の数増加(70%→78%)も見られた。英語字幕の提示の仕方も重要であると言えそうである。

今回は英語字幕の停止秒数を引き延ばし、その字幕が提示されている間に簡単な解説を行ってみた。その結果、上記のように英語字幕を「必要」とする学生が増えると共に、「不必要」とする学生も多少増加(7%→15%)してしまったようである。解説の仕方にも一工夫必要なのかもしれない。

<英字字幕の停止秒数>

	前回(2秒)	今回(5秒)
長い	2%	1%
ちょうど良い	51%	89%
短い	19%	1%
分からない	28%	9%

<前回聞き取った表現のリポート>

	99年度(6回)	前回(2回)	今回(2回)
			(解説付き)
必要	43%	67%	76%
不必要	32%	7%	15%
分からない	25%	26%	9%

<前回の表現の英語字幕>

	前回	今回
必要	70%	78%
不必要	4%	12%
分からない	26%	10%

<前回の表現のリポート回数(2回)>

	前回	今回
多い	5%	6%
ちょうど良い	80%	78%
少ない	4%	5%
分からない	11%	11%

4. 3 ひとつのパートの長さおよび1回に聞き取る表現について

1回に見るパートの長さ(5分~10分)について、今回は「ちょうど良い」とする学生が71%に過半数を切って(49%)しまい、その代わりに「短い」とする学生が43%にも及んだ。その内訳としては「10分~15分」とする学生が34%、「15分以上」とする学生が9%となっている。ここ何年かの傾向を見渡してみると、総じて「10分~15分」ぐらいの視聴を望む学生が多いということになるだろうか。が、貴重な授業時間内にただ映画を流すだけの時間を15分近くも取るのは現実には難しい。やはり教員側の要望も取り入れて、今回の「5分~10分」あたりが妥当な線だと言えるのではないか。

また1回に聞き取る回数についても何年かの傾向を見てみると、単純に数字の上からは「4つ」ということになるが、3つ・4つあたりで妥当と考えて良いだろう。

＜ひとつのパートの長さ＞

	98年度(10分)	99年度(15分)	前回(5分)	今回(5分～10分)
長い	3%	1%	1%	1%
ちょうど良い	57%	56%	63%	49%
短い	33%	40%	33%	43%
分からない	7%	3%	3%	7%

＜1回に聞き取る表現の数＞

	98年度(5つ)	99年度(4つ)	前回(3つ)	今回(3つ)
多い	27%	2%	3%	4%
ちょうど良い	66%	92%	86%	84%
少ない	2%	2%	6%	6%
分からない	5%	4%	5%	6%

#### 4. 4 表現の英語を聞く回数について

今回は表現の英語を聞く回数について調査してみた。今回の試みでは前回の試みと同様に、ヒントなしで3回、ヒントありで3回、解答提示後1回で行った。その結果、71%の学生から「ちょうど良い」の解答を得た。「その他」の21%では学生が自分なりに聞きたい回数を具体的に書いているのだが、その中で一番多く見られたのが、割合的には4%程度ではあったが、ヒントなしで3回、ヒントありで2回、解答後に1回であった。次に多かったのが、ヒントなしで2回、ヒントありで3回、解答後1回(3%)であった。

英語を聞くことに慣れていない学生のことを考えて、前回、今回とヒントありでもヒントなしでも3回聞かせてみたのだが、映画音声のみならず日本人教員による発音補助も行う(3の⑤の(2)参照)のであれば、以前のようにどちらかを2回(99年度以前は3回・2回・1回)にしてみても良いのかもしれない。

＜表現の英語を聞く回数＞(ヒントなし3回、ヒントあり3回、解答提示後1回)

ちょうど良い	71%
分からない	8%
その他	21%

#### 4. 5 聞き取り練習前の表現の推測について

今回は、学生が聞き取り練習前に表現の予測をいつ行っているかを調査してみた。その結果、その日のパート視聴中か視聴後のどちらか「一方」と答える学生、その「両方」とも答える学生がほぼ同数見られた。「見ている時の方が考えやすい」とコメントしている学生もいれば、「見た後ゆっくり考えたい」とコメントしている学生も見られる。また、「思いついた時点で何でも書きたい」とコメントしている学生も見られた。どちら(視聴中も視聴後も)にも予測していないと答える学生は1%しか見られなかったことから、ほとんどの学生は聞き取り練習前にとりあえず自分なりに「表現の予測を試みている」と言えるようである。

また、今回は何をきっかけに表現の予測を行うかについても調査してみたところ、「映画音声」と答える学生が多く(80%)を占めた。ホワイト・ボードの日本語訳を「必要」とする学生が多かった(4.1参照)だけに、もっと多くの学生が日本語訳のみから表現の推測を行なっているかと思いきや、そうでもないようである。ただ日本語訳をほとんどの学生が必要としている(94%)以上、日本語訳を見た上で映画音声をきっかけとして予測を行っていると考えられることができるだろう。もちろん、そこで映画音声を1回聞いて表現そのものを聞き取ってしまう学生の中には含まれている可能性もある。

〈聞き取り練習前の表現の推測〉(今回のみ)

一方(前か後)	45%
両方(前と後)	44%
しなかった	1%
忘れた	10%

〈パート視聴前の日本語訳〉

	99年度	前回	今回
必要	86%	88%	94%
不必要	4%	3%	2%
分からない	10%	9%	4%

〈聞き取り練習前の書くきっかけ〉(今回のみ)

映画音声	80%
日本語訳	10%
分からない	10%

4.6 聞き取る上で必要なヒントについて

今回は学生が表現を聞き取る上で使用したヒントについて調査してみた。英語を聞き取る以上、「映画音声」と答える学生が多い(77%)のは頷ける事実である。中には本当に英語の音声に耳慣れていない学生もいるため、数こそ少な目(36%)ではあるが「日本人教員による発音補助」もやはり必要であろう。また先ほども触れた通り、「ホワイト・ボードの日本語訳」(40%)や「直訳の日本語」(46%)も聞き取る上では必要と考えて良いだろう。数の上ではさほどの違いは見られないが、「直訳の日本語」(3の⑤の(1)参照)に対して「(ホワイトボードの日本語訳より)分かりやすいからあった方がいい」と、わざわざコメントしている学生が何人か見られた。このことから、言語的には少しおかしいこともある直訳の日本語に頼って、英語を考えている学生もいるということが考えられる。

ここで目に付いたのは、単語の「最初のアルファベット」を多くの学生が思いがけず高比率で「必要」としている(72%)ことである。そして、何とか少しでも聞き取りの手助けになればと思い考案した「音声的補助記号」に対しては、残念ながらほんのわずかの学生しか必要を感じていない(7%)という事実である。この記号については「別にヒントにならなかった」とコメントしている学生さえ2・3人見られた程である。

以上より、この聞き取り練習には「映画音声」と「日本語訳」そして単語の「最初のアルファベット」さえあれば十分とも言えてしまいそうである。与えてやるヒントに関しても“Simple is best.”ということであろうか。

<聞き取る上で使用したもの (複数回答可)> (今回のみ)

映画音声	77%
アルファベット	72%
音声的補助記号	7%
日本語訳	40%
直訳の日本語	46%
発音補助	36%
忘れた	1%

#### 4. 7 正解シートにおける音声的補助記号について

正解シートに関しては音のつながりや強勢の表記について、ヒントの時よりは多少「必要」とする学生が多く見られた。「発音に役立つ」とか「強弱がつけやすい」とコメントする学生がいる一方で、「表記の仕方を変えてみたら」とコメントする学生も見られた。考案するのに苦労したからと言って、それが学生の役に立つとは限らない。もう少し表記の仕方や記号の説明に考慮が必要のようである。

<単語間の音のつながりと弱めの子音の表示>

	98年度	99年度	前回	今回
必要	61%	72%	69%	58%
不必要	12%	6%	16%	24%
分からない	27%	22%	15%	18%

<音節・強勢の置かれる音節の表示>

	99年度	前回	今回
必要	69%	66%	48%
不必要	11%	15%	36%
分からない	20%	19%	16%

#### 4. 8 他の表現の紹介および穴埋め練習について

今回も主に他の表現の紹介(資料2参照)を行い、表現によっては時々穴埋め練習(資料2参照)という形で行ったところ、3分の2以上(80%)が「このままで良い」と答えている。その他(10%)というのは、他の表現の紹介や穴埋め練習の数を多少変えてほしいと具体的に提案している学生である。以上より、このような形で臨機応変に他の表現の紹介と穴埋め練習を行っていくことで、概ね良いと言えそうである。数に関しては「たくさんは覚えられない」とコメントしている学生もいるため、今回のように2・3個あたりで妥当だと考えて良いだろう。

<聞き取り練習以外の練習> (今回のみ)

今のままで良い	81%
不必要	6%
分からない	3%
その他	10%

#### 4. 9 発音練習について

今回は「発音練習したいもの」について調査してみた。その結果、発音練習は「不必要」と答える学生(10%)、必要かどうか「分からない」と答える学生(28%)の数の総数が3分の1を越える(48%)に至った。前回の調査では「1回でいい」という学生のコメントが気になったのだが、今回はそれ以上である。「その他」というのは自分の発音練習したいものを具体的に書いている学生であるが、「その他」と「このままで良い」の学生、つまりいずれの形にせよ「発音練習はした方が良い」としている学生は62%と過去最低である。

大学生ともなると授業中に発言したがないのが一般的のようだが、「いわんや発音練習をや」と言ったところであろうか。それでも一応教員の側としては何とか1回でも声を出して発音の確認をしてもらいたいものである。もっと学生が思わず発音練習したくなるような状況作りも必要なかもしれない。

＜聞き取った表現の発音練習＞			＜穴埋め問題の答えの発音練習＞		
	(99年度)	(前回)		(99年度)	(前回)
必要	88%	82%	必要	75%	75%
不必要	2%	6%	不必要	9%	6%
分からない	10%	13%	分からない	16%	19%

  

＜発音練習したいもの＞ (今回のみ)	
今のままで良い	6%
不必要	10%
分からない	28%
その他	56%

#### 5 学生自身の変化について (学生へのアンケートをもとに)

今回のアンケートは、前回のアンケートのちょうど半年後に、前回と同じ学生に対して行ったものである。今回は前回のように自習にすることもなく半年通して行うことができたためか、英語の音声に「慣れてきた」とする学生(15%→47%)、英語を聞くことが「好きになった」とする学生(28%→35%)、英語に耳を傾けようという気持ちが「強まった」とする学生(28%→36%)、英語に耳を傾ける機会が「増えた」とする学生(17%→25%)の増加をそれぞれ見ることができた。

また同じように、英語に対する気持ちや英語を勉強しようという気持ちに対しても、それぞれ「好きになった」(9%→19%)、「強まった」(15%→21%)と答える学生に増加が見られた。さらに今回は授業での映画の使用についても調査してみたところ、多くの学生(83%)から「使ってほしい」との答えを得た。以上、今回の調査結果からも、授業で映画を用いることは、英語に苦手意識のある学生の英語に対する意識を変えるのに効果的だと言うことができるだろう。また、多くの学生もそれを望んでいると言うことができそうである。

前回の実践報告で私は『「映画で英語を勉強する」と言うと、少し大きさに聞こえてしまうかもしれないが、「今、英語では何と言ったんだろう」と映画の英語に少しでも耳を傾けること自体、英語の勉強だと言ってもいいのではないだろうか。』と述べた。が、例年のことではあるが、

やはり中には「映画では英語を勉強したくない」という学生もわずかながら存在している。それどころか今回は、授業で映画を使うことで映画を見ること自体、「授業みただから嫌いになってしまった」とコメントしている学生、ここ何年かに渡って行ってきた映画を使っただけの聞き取り練習そのものについて、「聞いて覚えるだけだから応用力がつかない」と鋭い指摘をしている学生さえも見られた。この辺で映画の魔力を過信しすぎてはいけないうことを肝に銘じる必要があるのかもしれない。

<英語の音声>

	98年度	99年度	前回	今回
慣れてきた	41%	36%	15%	47%
元々聞くのは得意	4%	9%	13%	10%
元々聞くのは苦手	26%	28%	53%	27%
苦手になった	0%	0%	0%	1%
分からない	29%	27%	19%	15%

<英語を聞くこと>

	前回	今回
好きになった	28%	35%
元々聞くのは好き	31%	30%
元々聞くのは嫌い	23%	21%
分からない	18%	14%

<英語に耳を傾けようという気持ち>

	98年度	99年度	前回	今回
強まった	48%	48%	28%	36%
元々ある	22%	31%	38%	32%
元々ない	8%	8%	14%	19%
弱まった	2%	0%	2%	0%
分からない	20%	13%	18%	13%

<英語に耳を傾ける機会>

	98年度	99年度	前回	今回
増えた	16%	47%	17%	25%
元々ある	9%	19%	28%	29%
元々ない	9%	18%	33%	26%
減った	1%	6%	5%	2%
分からない	5%	10%	18%	18%

<英語に対する気持ち>

	99年度	前回	今回
好きになった	18%	9%	19%
元々好き	34%	29%	29%
元々嫌い	19%	38%	1%
嫌いになった	1%	3%	1%
分からない	28%	20%	22%

<英語を勉強しようという気持ち>

	前回	今回
強まった	15%	21%
元々ある	39%	31%
元々ない	27%	21%
減った	0%	3%
分からない	19%	24%

<授業での映画の使用> (今回のみ)

使ってほしい	83%
使ってほしくない	6%
分からない	11%

## 6 終わりに

今回の調査で、「映画は勉強と言うより慣れのものだと思う」とコメントしている学生がいた。全くその通りで、「英語」は「勉強する」と言うよりも「習うより慣れよ」の教科である。そして「慣れる」ために英語の映画を用いることは、確かに最良の方法のひとつと言って良いであろう。

ただ、中には「近くに映画館がない」とか「寮だからテレビやビデオがない」と物理的不可能をコメントしている学生もいる。そうは言っても、今回「日常生活の中で触れている英語」についても調査してみたところ、過半数以上の53%もの学生が「映画」と答えている。ただ、ほんのわずかながら「映画」を抜く一番手が存在しており、それは「洋楽」(56%)であった。

「映画」が手軽でないなら、「洋楽」でもいい。とにかく学生の少しでも興味があるもので、毎日少しでも英語に慣れ親しんでくれさえすれば、それこそ英語を身につけるための最良の方法となるのではないか。

実際のところ、英語に「慣れる」ためには、授業の90分ではまるで話にならない。やはり学生自身の自主的な日常生活での試みが重要なウエイトを占めてくる。授業ではその「きっかけ作り」をしてやるだけである。そしてそれこそ教員側の腕の見せ所となるのである。今回の「聞いて覚えるだけだから応用力がつかない」のようなコメントを避けるためにも、わずかでも更に工夫を重ね、学生が英語への興味をますます伸ばしていってくれることを願っている。